

● 白州だより

2011年7月23日
二十四節気 大暑
発行 白州郷牧場
山梨県北社市白州町横手 2259
TEL: 0551-35-4520
FAX: 0551-35-2970

白州郷牧場からの夏のおたよりをお届けします! <http://www.hakusyu.jp/> info@hakusyu.jp



被曝食のすすめ ～人間は「予定調和」から外れたものようだ。

白州郷牧場・キララの学校 見田 由布子

家を建てた。還暦を過ぎ、野戦野営に疲れ果てたのである。家は地熱を利用するという床暖房とオール電化である。歳にとって寒いのは敵わないし、電気・ガス・灯油と分けての支払いはい億劫だからである。その最中に3・11が来た。啞然として「オール電化などという、なんて馬鹿なことをしたのだ」と呆然とした。

七年前から麴を作っている。キララの季節の学校で味噌を仕込むので麴も自前で作りたかった。

麴の師匠から「100回仕込め!」と言われ、15キロの米を100回麴にした。その麴をどうする?味噌を仕込むしかないではないか。だから、平成17年の5ヶ月、麴を仕込んで味噌を仕込むことをひたすらやっていた。6トンあまりのその味噌も今年3月ようやく使い果たした。この間、カビについて、麴について、発酵につ

いて、私なりに少しは勉強し実験してきた。加工所は牧場の代表が「現金を持っていても仕様が無いだろう」と言うので当時の有り金を使い果たして建てた、老後の「遊び場」だと思っていた。

誰も公式には言わないけれど、福島原発の状況は人類史上最悪の事態となっている。最悪というのは多くの死ぬ人が出るということである。死の分母は3000万～4000万だそうである。

学者・知識人・政治家・官僚・マスコミの見解・意見・言説を数多く見たり聞いたり読んだりした。しかし、「それで、これからいったいどうすればいい?」という問いに答えるものは少ない。

原発の事態が報道された時、「希望は、広島・長崎にあるのではないかと密かに思った。本当らしい。要約すれば、

1、玄米を食べる。糠に含まれるビタミン・ミネラルを取り入れる。しかし、糠にアブシジンという毒素があって、これで胃などがヤラれる。12時間水に浸して置くと「発芽状態」となり、この毒素が外れる。無農薬の米は手に入れにくいので、普通の玄米は、浸すとき昆布を入れると農薬を吸着してくれる。この島は2000年前から「瑞穂の国」なのである。

2、塩は天然塩を使う。生物は海から陸に上がってヒトになった。海を身体に持っているのである。

3、味噌は毎日食べること。発酵の過程で生成される酵素を取り入れる。生状態が良い。酵素は熱に弱い。熱しすぎないこと。野菜に生味噌をつけて食べると良い。大腸は「第二の脳」とも言うという。

4、砂糖は控えること。白砂糖の入ったものは食べないこと。血液に1%の白砂糖溶液をかけたなら赤血球が溶けてしまう、と言う。

5、牛乳は飲まなくてもよい。アメリカのハーバード大での12年間、78,000人の婦人の骨密度の調査の結果、骨粗しょう症と牛乳が深く関係するという発表があった。牛乳はカルシウムとたんぱく質が共に多い。これが同じ食物のなかに入っていると、結合が強く、カルシウムもたんぱく質も全く動きがとれなくなるためと言う。



牛乳は四つの胃を持った牛の赤ちゃんのためのものなのである。牛乳を利用するのなら、発酵させて造るチーズやヨーグルトがあるではないか。

これらは、長崎の爆心地から1.4キロメー

会」の「放射能汚染から命を守る最強の知恵」(コスモ21、発行)からである。表題から、ともすれば感じる奇矯な内容ではない。詳細を知りたい人は読んで欲しい。

放射性物質は、太陽や風や水(海水)と同じで県境も国境も無い。現在、世界には400基以上の原発があるという。それが事故でなくとも微量に放射能を常時吐き出している。

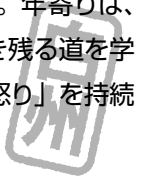
北の海に南の魚がいるという話を聞き、「二酸化炭素の過剰排出で温暖化し海も温まったのか」と思っていた。そうではない。「電気出力が100万キロワット」の原発は熱出力が300万キロワットあり、その差の200万キロワットは、温排水として海に捨てられている。その量は、1秒間に70トン。海水を7℃上げている」(PKO法「雑則」を広める会、「未来に続く命のために原発はいらない」より) そうだ。海が温くなるのは当たり前である。愚かなことに、私はそれを読み知ったのも今回初めてである。

極論では無いと思う、厳密に言えば「逃げ場」など無いのである。だから、「反原発・脱原発」が大切なのだろう。

徹底して「身体の自衛」をするべきだと思う。其れしかない。庶民は「棄民」されて来たのだ。ここまでされて、尚、「他人の頭に頼るな」と言いたい。「誰もなんともしてはくれないのだ」ということを、今回の原発は身に沁みて知らせてくれたではないか。そう自分に言い聞かせている。

自然は「予定調和」という。「独立し各自の内的法則によって自己発展する存在(単子)が、相互に対応し、世界の秩序が保たれる」という説らしい。自然には神様が居るのだろう。人間の世界もそうであればよいが、しかし、人間は自然ではなく人工物のような。そう考えれば、この70年の核利用の有様と結果がわかる気がする。子どもは「自然」だと言うけれど、自然から離れることを人は「成長」と言う。そしてそれを願う。いっそ老成してしまえば良いのである。それで「自然」に近くなるだろう。

わが身を振り返らず、私は怒っている。年寄りも、子供たちや若い人たちが、殺されずに生き残る道を学び、考え、実践するしかない。今回は、「怒り」を持続させるべきだと、そう思う。



お元気のことと思います。6月1日、磯田さんが放射線測定器をもって白州に来ました。京大の小出裕章教授が「花崗岩地帯は放射線のレベルが高い」といっているので測りたいと言うものでした。わたしは白州はわずか170軒程度の村で80～90才（100才含む）が90人前後生きているので花崗岩が悪さをするとは思えないといったのですが、それでも測りたいということで尾白川の河原を案内しました。結果は、若干、高かったです。白州の花崗岩はまだ新しいのでラジウムやラドンが何かを出しているのかもしれませんが。

生態系の終わりはチェルノブイリから

昔、人類が普通に生きていけるのは250年くらいとあなたがいい、私はそんなものかと思っていました。今回の福島第一原発をみて、250年は縮まったと思いました。今は、250年説を迂闊にも見逃した自分の無知を恥じています。あなたのいった250年説は、チェルノブイリのことを指していたのですね。日本および世界の環境危機は、福島第一からではなく、ニューメキシコでの初核実験、広島、長崎、ハンフォード、そして400回を超える大気圏での実験と来て、生態系にとどめを刺すのがチェルノブイリでした。生命が折り合ってはいけな、生態系の外にある放射能という毒のもとに生態系は置かれていました。今、福島で大騒ぎですが、実は世界の生態系の終わりののはじまりを通告されたのは、チェルノブイリだったのですね。

磯田さんからは、「福島原発事故に関して、椎名の意見をせよ！」といわれ沈黙に対しては叱られております。私は見苦しいですが、すべてを知っていたのはあなたであり、奥地の責任だから彼に言え、と言い訳しています。彼には騒いでもいいけど「居残り佐平次」にならないよう伝えました。チェルノブイリの時、日本の原発は30基台でした。しかし、今は54基あります。すべて日本人が受け入れたものです。

錯体に賭ける

この間の5月の連休時に、話し合ったように、私は放射性物質に対して断念していました。祈ること以外、何も出来ないと思っていたのです。そう思っていたのですが、やはり、錯体に賭けてみようと思うようになりました。元素転換などできるはずがないと笑われるでしょう。あなたもそう思うでしょうし、わたしもそう思いま

す。私たちの連休の時の議論のひとつは、「白州だより」前号の尾崎豊「太陽の破片」として表現しました。もうひとつの議論は「微生物放射性物質の記憶があるか無いか」でした。そして、無いだろう、という話に落ち着きました。しかし、あれから、小出裕章さんの「放射能汚染の現実を超えて」という本を読みました。そこで、こういう記述を見つけました。



「スリーマイルの事故から7年後、圧力容器のフタが開けられたとき、容器の中には、浴びたら1分以内に人間が死ぬレベルの放射線が飛びかっていた。その容器の水の中に、単細胞生物、バクテリア、菌類、そしてワカメのような藻類までもが炉心の中に増殖し、繁茂していた。」

そして、過酸化水素で、何度殺しても、生命は再三再四、復活してきた、という内容でした。私は微生物（土壌菌群）には記憶はあると確信しました。次に、鎌仲ひとみさんと肥田先生の本と映画を観ました。わかったことは、福島県のみならず、チェルノブイリ以来、ヨタヨタ生き延びてきた東日本の生態系も完全にとどめを刺され、東京が完全に被曝しているということでした。

そして、こう思ったのです。放射能が、なぜ、かくも臓器に親和性が高いのか、と。それは、逆から見れば弱点ではないかと思うのです。弱点があるかどうかは、フリーラジカルの振る舞いで判断できると思ったのです。もう仮説でどんな実験がなされるか、あなたには瞬時にわかったでしょう。ある鉱石を使わなくても〇塩価錯体は、花崗岩由来でできているのかもしれませんが。けれどもオープンハイマーの点滴よりは、優れたものを作り出せると思うのです。

花崗岩には、まだまだ秘密がありますね。「花崗岩がなければ、この地球に生命が生まれなかったのではないか」というあなたの学問テーマを私は信じるようになりました。「尾白の谷のナウシカ」になるまで、もう少し時間はあると思います。

(*奥地拓生 岡山大学准教授)

3 11から四ヶ月が過ぎようとしているのだが、福島原発の事故は一向に収束する気配がなさそうに見える。日々入ってくるニュースから分かることは、事態が想像以上に悪かったということばかりだ。いや、「誰もが想像していた通り」というべきだろう。誰もが想像はしていたが、実際に確認することができなかった「最悪の事態」が、今になってようやく確認されつつある。

政府や東京電力への非難の声が高まっているが、今回の事態に関して責任を感じている人間なんてどこにもいないということを、誰もが薄々とは気がついているはずだ。民主党からすれば、原発を推進してきたのは自民党であり、東電関係者も本音を言えば、原子炉を設計・建設したGE・日立・東芝といった企業が何の責めも負っていないのを腹立たしく思っているのではないかと。福島県民は都市部に電力を供給するために原発を押し付けられたと憤り、その近隣にいる人々は、彼らが雇用や交付金に釣られて原発を誘致しやがったと蔑む。

事態はねじれている。オウム真理教が起こした地下鉄サリン事件のときは、一部の狂信的な教団信者によるテロ行為という物語として理解すればよかった。メディアはそのように報道し、人々もそれで納得できた。日本人はオウム真理教を、日本人という枠組みの外側に位置づけることによって平静を保つことができた。麻原彰晃は突然変異的に発生したノイズに過ぎず、正常な日本人は彼の企てたことに何の責任も感じる必要はない、そうみなされた。

しかし、今回はそういうわけにはいかない。毒素をまきちらしているのは日本人の日常を支えてきた発電所なのである。少なくとも国内においては、諸悪の根源となる加害者も、純粋無垢な被害者もないのだ。また、福島第一原発が築40年も経過していたように、そこには日本の戦後史が深く関わっている。過去から現代に引き継がれ、また未来にも悪影響を及ぼしかねないという意味で、時間という垂直的な流れを無視して原発を論じるわけにはいかない。だから今回、半藤一利の『昭和史』をとりあげた。昭和の全体的な流れがわかりやすく記述されている。

福島原発事故以降、書店には多くの「原発本」が並ぶようになった。反原発運動に携わってきた識者が原発や放射線の危険性について多くのことを語り、それに触発された人々が大規模な脱原発デモを企画している（マスコミには徹底的に黙殺されているが）。私もこうした「原発本」から多くのことを教えられたし、日本は脱原発の方向へ向かうべきだとも思う。しかし、日本人と原子力の関係はそんなに単純なものではないのかもしれない、とも危惧している。つまり、福島事故によって原発の危険性が確認されたので、明日から別のエネルギー政策でいきます、というふうにはいかないのではないかと。

白州郷牧場の本棚から



『昭和史 戦後篇 1945-1989』 半藤一利著（平凡社ライブラリー）

『昭和史：戦後篇』に書かれた次のエピソードは、日本が原爆大国となった理由が敗戦国であることと深く関わっているのではないかと、思わせる。このエピソードの初出はマーク・ゲインというジャーナリストが占領下の日本を詳細に記述した『ニッポン日記』（ちくま学芸文庫）だという。1946年2月13日、外務大臣官邸で、吉田茂外相、松本丞治国務大臣、そして終戦連絡事務局次長だった白洲次郎の三人は、GHQのホイットニー准将と面会していた。ホイットニーは彼らに、GHQにとって日本側が提示した憲法草案が全く容認できないことを宣告し、GHQが用意した草案を提示した。まさかアメリカ側から憲法の草案が出てくるとは

思っていなかった三人は驚愕した。そこには戦争の放棄、象徴天皇制、そして貴族制度の廃止が盛り込まれていた。三人がその草案を検討している間、ホイットニーはヴェランダに退いていた。ちょうどその時、アメリカの爆撃機が轟音とともに飛び去っていった。白洲に呼び戻されたホイットニーは部屋に入るなり、こう言ったという。「原子力的な日光の中でひなたぼっこをしていましたよ」。この発言が何を意味しているのかは明白である。アメリカには原子爆弾という切り札があるということ、そしてそれはいつでも使用可能ということをはのめかしたのである。日本国憲法の成立過程の裏には、原爆の威力とそれに対する畏怖があったのだ。

原子力とは日本人にとって、エネルギーの供給源であるよりも先に、権力の象徴だったのだ。広島・長崎に原爆を投下され、その怖さを身をもって知らされた日本人だからこそ、それを手なずけ、飼いならしたい、という誘惑にあらがえなかった。私は日本の原子力史をそのように見る。それがとてつもなく危険な代物だということを承知の上で、日本人は原子力を抱きかかえた。征服者が野蛮な武器として使用したあの原子力を、日本人は換骨奪胎して平和利用している。そんな甘美な優越感に浸ってきたのではないかと。そうでなければ、非核三原則とこれほど多くの原子炉が同じ一つの国家の中で同居しているというつじつまの合わないさを説明することができない。

もし、敗戦国となった日本が、自らその精神的外傷を癒すために原発を導入したのだとしたら、そんなやり方でしか敗戦という事実と向き合えなかったのだとしたら、福島原発事故以上にみじめな結末があるだろうか。私は原発反対を叫ぶことも、東電や現政権を声高に糾弾することも控える。それは日本人であることのみじめさを糊塗しているように思えるからだ。私は原発よりもまず日本人を問題にしたい。誰からも理解されないだろうし、何かを変えられるあてもない。しかし、そこからはじめるしかないと思っている。

（内藤光）